第255回

初冬の野菜産地リレー
が端境期生む

野菜の生産・流通にとって11月はいわゆる端境期で、11月までの産地の終盤と、12月以降の産地の出だしが重なる月である。11月に関東などの抑制物の切り上がりと、西南暖地のスタートとの産地移動が円滑に行なわれないと、急騰、暴落が発生する。夏場は東北・北海道の夏秋野菜が、秋には関東産中心と移行し、11月末以降には西南暖地の冬春野菜へと移るのが近年のパターンだが、ここ2~3年は、天候異変の増加により、夏から秋、冬まで入荷が安定せず、相場も高騰気味に推移している。関東地方は、春と晩秋に中心産地となる大型生産地域。これからの冬春野菜への切り替えが気になるところだ。

カボチャ

11月は入荷減で単価高に。北海道産の出荷で安定か

【概況】

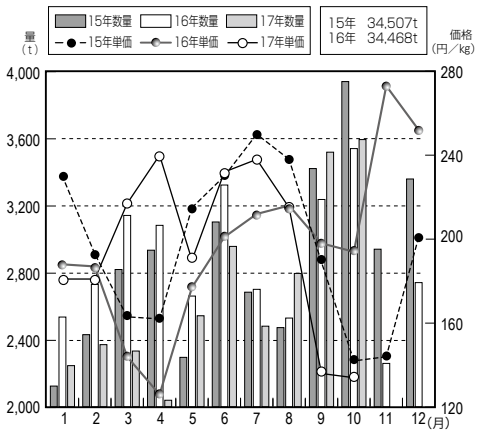
東京市場のカボチャの入荷は、通年では北海道が全体の35％程度でトップだが、その次にニュージーランド、メキシコが続き、冬から春までは輸入物が中心となる。ただし7月ごろから始まる北海道産は、11月まで残量があるものの、この11月から冬至にかけて増えるのがニューカレドニアやトンガ産だ。11月は北海道産から輸入物への切り替え時期で、グラフでもはっきり分かるが、10月と12月の間が毎年入荷は少ない。

【背景】

国産と輸入品がマーケットを棲み分けている野菜は、ブロッコリーやアスパラガスもあるが、同一品種で完熟物が年間ほぼ切れ目なく流通しているという意味でカボチャは特異な存在である。それは昭和時代の末頃、メキシコを皮切りに海外で日本種を使って、完熟品を作るための栽培法から収穫作業まで、現地で教えながら生産させた青果物専門商社たちの、開発輸入の成果である。消費者は、国産とほとんど変わらない品質の輸入物を受け入れた。

【今後の対応】

11月はカボチャにおける端境期であり、入荷が少なく高騰することが多い。この時期は、東北から関東での抑制栽培カボチャが求められる。東北地区の野菜に強い種苗会社が、いくつかの抑制時期専用の品種を開発しているが、生育期に天候異変の多いこの時期の生産は、なかなか安定しない。今年は10月までは前年並みの推移をしていたが、11月は上旬現在で、主産地北海道が前年より4割も多く、ニューカレドニア産の輸入も早めに増えている。



ハクサイ

長野産の抑制物が増え茨城も順調。早い冬到来に対応

【概況】

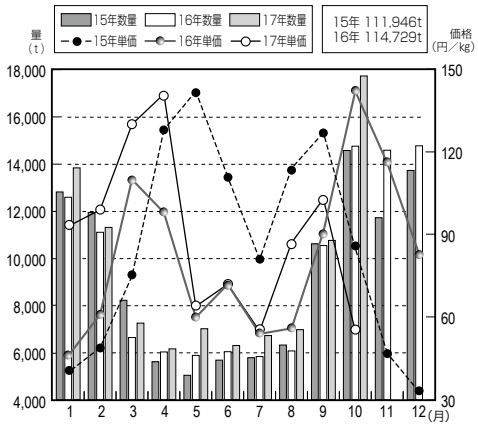
東京市場でのハクサイの今年の入荷動向は、ここ2~3年の推移と比べると春から夏にかけての入荷量が増えている。10月は茨城のスタートは昨年並みだったが、長野産が前年より30％も多く単価は前年同月より6割以上の暴落だった。11月に入っても上旬現在では茨城が本格化してきたが、長野産が前年同期の3・6倍もの出荷をしているため、10月に続いて6割安の展開。これからは、茨城産が十分出てくるだろう。

【背景】

ハクサイは、秋から冬にかけて寒さが強くなるにしたがって、日本一の大産地である茨城県からの出荷が増え、そのピークが10月から始まり年末に向けて急激に増えるのが通例だ。しかし、10月、11月に入荷の増減を左右する要因の一つが、長野県の抑制産地からの出荷のいかんである。この長野産は本来は夏秋期の主産地だが、11月ごろに出荷されてくるものは、夏秋物の残量ではなく、鍋シーズンの初めに供給するために作った抑制産地物だ。

【今後の対応】

長野産は、例年より早く寒さがくれば切り上がってしまうが、暖冬気味だと終盤まで出してくる。今年も10月~11月上旬までは、ピークが始まった茨城産とバッティングしてしまった。しかも、そのために価格暴落状態でも、長野産は平均単価の3割前後は高い。県本部に力のある長野産が相場を引っ張ろうとするため、11月はハクサイの入荷や相場が不安定になることがある。今年は早めの冬が到来しているようだが、茨城産の生育状態は良好だ。



今年の市場相場を読む

流通ジャーナリスト
小林 彰一
青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。㈱農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙『新感性』、月刊『農林リサーチ』を発行。著書に『日本を襲う外国青果物』『レポート青果物の市場外流通』『野菜のおいしさランキング』などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

アスパラガス

産地が変化。年末に向けメキシコ産が再注目浴びる

【概況】

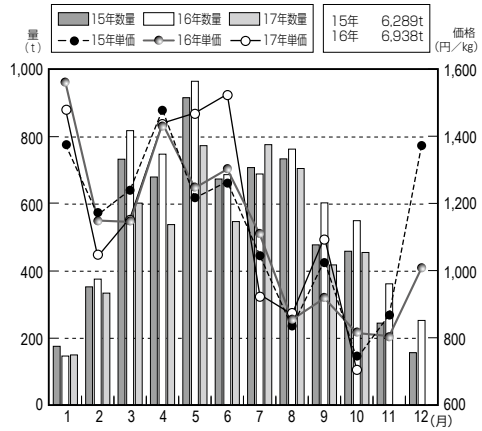
東京市場のアスパラガスの入荷動向は、全体としてここ10年の推移を見る限りは、流通の総量はほとんど変化がない。ただし総量は保ちつつも、産地構成はかなりの変化が見られる。とくに変わったのが、年明けから春先までの入荷はメキシコ産、カリフォルニア産の独壇場だったが、この時期に長崎、佐賀などの長期どり産地が台頭して数量を増やしており、4月くらいまでのカリフォルニア産の輸入が不要になった。

【背景】

アスパラガスは、かつて国産は春から初夏にかけての季節野菜であった。昭和末期からそこに年明けからメキシコ産が輸入されて、春に国産が始まるまで供給期間が延びた。その後、9月ごろからクリスマスに間に合う時期くらいまでの期間にオーストラリア産が輸入されるようになると、ほぼ周年供給体制が整ったが、これに加えタイ産やフィリピン産などの完全周年供給が可能になり、周年化が完結。日本マーケットに周年需要が開拓された。

【今後の対応】

その周年需要は、国産と輸入物とが棲み分けることで創造されたが、これまで輸入物が担当していた時期を狙って、国産がマーケット収奪作戦を展開する。それは、熱帯栽培をヒントに佐賀、長崎などが立茎栽培で収穫の長期化に成功したこと。しかしながら依然として、11月以降の出荷は難しい状態だ。今ここに入り込んでいるのが、かつては年明けからの産地だったメキシコ産である。今年もこれからの時期、輸入先も増えて入荷は安定推移だろう。



ニンジン

北の産地から千葉産へリレー不具合。輸入物偏重に課題

【概況】

東京市場のニンジンの入荷は、総量としてはここ10年を見ても凹凸はあっても、その入荷は一定である。一方で相場はすぐ変動する。家庭用としても業務加工用でもニンジンは基本食材であり、国内の需要に対し必ずしも安定しない国産を、輸入で調整することで需給が成立している。近年、ニンジンの輸入量が10万t前後を行き来している。大口需要者は不安定な国産をあてにせず、輸入品を中心にして国産で補完している。

【背景】

一定量の確保が不可欠なニンジンの一つの大きな山場は、11月である。夏場からの産地である北海道、青森などと、関東の大産地である千葉産との切り替え時期がちょうど11月に当たる。例年では10月までは北海道、東北産地が7~8割を占めるが、11月には千葉産と半分になる。12月になると千葉産が主力になり、見事なリレーぶりが本来の姿だ。しかし根菜類のニンジンは意外に天候異変に弱く、このリレーがうまくいかない年も多い。

【今後の対応】

今年は、春の徳島産から夏秋の北海道、東北産地が過去2年では、最も入荷量が多い状態で推移してきた。そのため夏から相場は暴落ぎみ、10月は北海道、青森とも前年より2割前後多い入荷で、単価は3分の1。だが11月上旬には数量も落ち着き、単価も戻してきた。これからを担う千葉産は、11月時点で前年より5割近く増やしている。この冬は供給面では安心だが、相場に関係なく入ってくる中国産が相場をかき乱す可能性ありそうだ。

